

ダウエー族とはだれか

—「中心の中の周縁」からみたビルマ世界—

平成 27 年入学

派遣先国：ミャンマー連邦共和国

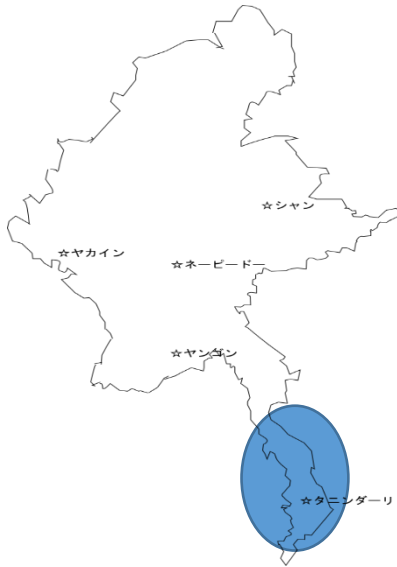
角田 彩佑里

キーワード：下ビルマ、ビルマ族、ダウエー族、民族分類、エスニシティ

対象とする問題の概要

ミャンマーは 135 の民族からなる多民族国家である。この 135 の民族は、ビルマ民族を筆頭とする 8 つの主要民族グループのどこかに属している。ビルマ族の多い地域は 7 つの管区に、残り 7 つの主要民族にはそれぞれ州が与えられている。

私が調査を行ったミャンマー最南部・タニンダーリ管区は、ビルマ族が多数派の地域である。なかでも、ビルマ族グループに属すダウエー族とベイ族が、タニンダーリ管区内のダウエー県とベイ県に多数派の民族として集住している。しかし国定民族であるこの 2 民族は国民登録証など書類の上ではビルマ族として扱われており、有名無実化している。



それに対して彼らはこれまで目立った活動を行ってこなかったが、2014 年の国勢調査を契機にダウエー県においてナショナリズムが高まりを見せ、調査票の民族欄に「ダウエー」に記入する人々が続出した。現在では政治活動も行っている。

研究目的

ミャンマーの民族研究においては、特にシャン系諸民族について多くの研究がなされてきた。それらの研究の中ではミャンマーの民族の曖昧さや、周辺民族から見たビルマ族の姿が論じられてきた。また、ビルマ族が想像した「少数民族文化」を少数民族が受容し文化を再編する姿が描かれてきた。他者の規定と差異化によってビルマ族は「ビルマ族らしく」なることができたのである。

それではダウエー族はどうだろうか。ダウエー県は閉ざされた空間である。ミャンマーの中心から遠く離れ、移民は少なく、ビルマ（ダウエー）族とカレン族が多くを占める地域である。独立後の国民統合の中でいかにして彼らは「ビルマ族」となり、なぜ今再び「ダウエー族」となろうとしているのか。

ビルマ族という中心の中で地理的にも最も周縁に位置し、ビルマ族であるか否か曖昧な存在であるダウエー族の視点から、ミャンマーの民族について再考したい。

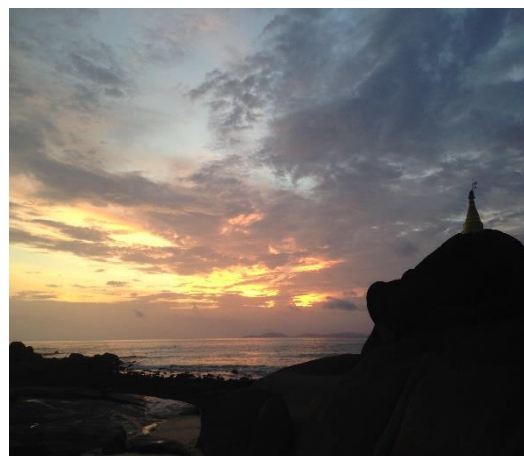


[ダウエー族男性伝統の髪型]

フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークでは、ダウエー市とその周辺村落、そしてベイ市という2地域を訪れた。ダウエー県とベイ県はビルマ語の方言を話す、他地域のビルマ族から「なまりの強い地域」とひとくくりにされる。しかし実際に訪れてみるとその2つの都市の性格はまるで異なっていた。ダウエー市は閉鎖的で文化的な古都（現在はタニンダーリ管区の管都）である一方、ベイ市は移民を多く受け入れる開放的で活気のある商人の町である。言葉に関しても、実際にはダウエー族とベイ族では異なっており、ベイ方言はダウエー方言に比べ、ややビルマ語と近い印象を受けた。そして民族に関しては先にも述べたようにダウエー市は、ビルマ（ダウエー）族とカレン族がほとんどであり、他地域に比してインドや中国からの移民はかなり少ない。ダウエー市近郊の村は港町であるが、現時点でその港は国内輸送を専門としており、都市部との距離も離れている。一方、ベイ市は民族的にかなり多様であり、インド系、中国系、中国系とビルマ系の混血といった人々がかなり多い。また、仕事を求めて他都市から移住してきたミャンマー人もかなり多い。ベイ市中心には古くから比較的大きな港があり、真珠やエビの養殖など儲かる仕事が多いことがその理由であると考えられる。

このような環境の違いからか、両都市では民族意識も大きく異なっている。ダウエー族にはここで生まれ育った「純粋なダウエー (Dawei Sit Sit)」



[ダウエー県S村の港]



[ベイ市内にて、調査協力者と]

が多く、近年は「我々はダウエー族である」という主張が強くなってきている。ただし、「ダウエー族など存在しない」「ダウエー語が話せればカレン族でも移民の子孫でもダウエー族である」などと解釈は人によってかなり異なる。一方ベイでは民族的に多様で民族間結婚が進んでいるためか「我々はベイ族である」という主張はベイ市内での聞き取り調査の中で見受けられなかった。

今後の展開・反省点

当初は同地域にて別のテーマを想定していた。従来のテーマは調査が難しいであろうことはあらかじめわかっていたにも関わらず、代替のテーマを考えていなかったためフィールドで急きょテーマを大幅に変更した。そのため事前準備が十分ではなく、段取りも非常に悪い形での調査となってしまった。今回のフィールドワークにおけるもっとも大きな反省点である。また、今回の調査では調査に協力してくれた友人一家にずっとお世話になってしまった。友人の家族という範囲内での調査となってしまったため、今回作った人脈を生かして次回はまだ幅広い範囲での調査を行っていきたいと思う。

次回以降のフィールドワークでは、ダウエー族としての主張をだれがどのような経緯ではじめ、どのような形で展開していったのかを追っていきたい。また、県外の地域に居住するダウエー県出身者へのインタビューなどにも取り組んでいきたい。